

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 1 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22330109

研究課題名（和文） 農村地域における社会企業活動の国際比較ーアジア諸国を中心にしてー

研究課題名（英文） International comparison on social entrepreneurship in rural areas
- With the focus on Asian countries-

研究代表者

大滝 精一 (OOTAKI SEIICHI)

東北大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：20138556

研究成果の概要（和文）：農村開発や地域の振興は社会状況に対する不満（Strain）から引き起こされるが、貧しい生活に対する人々の不満だけで社会企業活動が始まるわけではないことも明らかになっている。社会的課題のプロセスは意識・問題との対話・解決案の創造・評価という4つの段階で捉えることができる。課題を解決していく中、起業活動は、農村地域の住民（女性とか）の地域コミュニティ運営参加への内発的動機づけを高めるという傾向が見て取れた。また、コミュニティにおける創業活動の拡散を促進するうえで、模倣が重要な役割を果たした。

研究成果の概要（英文）：Rural and regional development comes from strain with social conditions, but it has been made clear that not all social entrepreneurship can be started with merely strains with lives in poverty. The process of dealing with social issues is captured in four stages of awareness, dialogue with problems, creation of solutions and evaluation. In that process, entrepreneurial activities have been observed to increase the intrinsic motivation of participating in local community management of rural areas. In addition, imitation plays an important role in promoting the diffusion of the business start-ups in the community,

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2011年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2012年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
年度			
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・経営戦略

キーワード：社会企業活動、組織学習、社会運動論、社会問題解決のプロセス、女性起業
社会ネットワーク論、農村地域、国際比較

1. 研究開始当初の背景

アジア地域における経済発展の中で、これまで各国の農村地域は発展から取り残さ

れた後進地域、ないしは将来工業地域へと展開する開発途上の地域としてのみ位置付けられることが多かった。しかし、近年のアジ

アを中心とした急激な経済成長の中で、こうした農村地域においても多様な社会企業活動（Social entrepreneurship）が台頭し農村地域の姿を変えつつある。

2. 研究の目的

この研究では、アジアの都市部の発展の影に隠れて、これまで余り注目されてこなかった農村地域のこうした多様な社会企業活動に光を当て、共通の分析枠組みをベースに事例を中心とした国際比較を通して、各国の特徴や独自性を明らかにするとともに、アジア全体の中で農村地域の社会企業活動から学ぶことができることを探ることを目指す。

この研究の目的は主に次の3点を明らかにすることにある。

第1は、共通の基礎理論に基づいて、比較事例分析を行うことである。社会企業活動は学問的な研究対象となって間もなく、理論的な研究もまだ緒についたばかりの段階であるが、この研究では主として社会運動論、社会ネットワーク論、ソーシャル・キャピタル論などの基礎理論に依拠しながら、何が農村地域の社会企業活動の促進要因および阻害要因であるのかを問題解決のプロセス、社会企業活動の展開、社会ネットワークの形成、リーダー＝ブローカーの役割、社会企業家の養成・増殖、社会企業活動を通じた組織学習、社会企業活動の成果などという国際比較の論点を通して明らかにしていく。

第2は、こうした社会活動の中でも、活動のリーダー＝ブローカーの役割に注目し、彼（女）らの特徴と行動パターンを明らかにするとともに、その継続や継承がどのように行われているのかを解明する。近年のソーシャル・ネットワーク論やソーシャル・キャピタル論においては、結束型ソーシャル・キャピタルと接合型ソーシャル・キャピタルの2つの性格の異なる要素をバランスさせ、社会

企業活動を促進する存在としてのリーダー＝ブローカーの役割が注目されている。一般に、各国の農村地域ではこうしたリーダー＝ブローカーの不足が大きな課題となっており、農村地域の振興と社会企業活動の促進をはかるうえで、リーダー＝ブローカーの存在はカギとなる要因となっている。この研究では、事例研究を通して各々の活動におけるリーダー＝ブローカーの特質を明らかにするとともに、こうした存在を継続的に育成・拡大・普及し、リーダー＝ブローカーの継承をどのように実施しているのかを組織学習などの分析枠組みを活用して解明していく。各国の農村地域の社会企業活動は少数の特定の個人の力に依存する部分が多く、その個人がいなくなることで、活動が衰弱ないし消滅してしまうことが少なくないといわれている。こうした共通の課題にたいし、各国の事例ではどんな解決策を模索しているのかを明らかにすることにより、理論と実践の双方にたいし、重要な貢献がなされることが期待される。

第3は、事例の国際比較により、各国における農村地域の社会企業活動の特徴や独自性、あるいは国を超えた共通点が何かを明らかにすることである。各国の農村地域の社会企業活動の状況は、たとえばタイにおける一村一品運動政策の日本からの導入の事例に見られるように、各々の国の農村地域の振興政策によって大きな影響を受けている。マクロな地域政策の違いは、ミクロの個別の社会企業活動にも何らかの形で反映されているはずである。しかし、他方において、マクロな地域政策が社会企業活動のすべてを規定しまうわけではない。特に近年におけるアジア諸国における農村地域の社会企業活動では、日本のような先進国が他の新興国・途上国に一方的に影響を与えるという関係だ

けでなく、社会企業活動が各国で同時進行し、互いの経験と実践が相互浸透し合うという関係に変貌しつつある。アジアワイドで各国の経験と実践を交換・共有し、互いから学び合い、さらに高い実践のレベルに引き上げていく取り組みが必要とされている。この研究はこうしたアジアワイドで農村地域の社会企業活動に関する討論の場をつくり、ファームを築くための機会を提供することを目的とするものである。こうしたフォーラムを通してアジアワイドでの社会企業活動による農村地域振興にたいし、幅広いインプリケーションを引き出すことがこの研究の第3の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、わが国の農村地域における農商工連携と女性起業、日本とタイの間での一村一品運動、ベトナムにおける農村地域の貧困削減を目指した社会企業活動、中国温州地域における創業活動の連鎖現象などの各国における社会企業活動の事例をベースに、共通の分析視点に基づきながら、これらの事例を比較し、経済発展の中でこうした農村地域における新たな社会企業活動のもつ意義と可能性を解明することを研究の目的とする。

プロセスと社会運動の視点では、農村地域の住民の自立活動やイノベーションによる自らの課題解決の方法を定性的に分析し、貧困者の小規模なソーシャルビジネスにかかわる神話を解明する。その事例研究を踏まえて、個人の課題解決で研究されてきた問題解決の理論(Theory of Human Problem Solving)』が社会的課題の解決にも当てはまることができるかということを検証する。

農村地域における起業活動、例えば、女性起業、過疎高齢化が進む中山間地域における今後のコミュニティ運営を考える際、既存の運営体制の再編、具体的には、多様な人材

の運営参加が不可欠である。農村女性起業は、その潜在的担い手層である女性の、コミュニティ運営関与の「起点」になりうると期待される。こうした展望の下、農村女性の起業活動への参加が、地域コミュニティ運営への足掛かりになるか否かについて議論した。本研究は、中山間地域指定区域に所在する農村女性起業の担い手女性を対象にアンケート調査を実施した。アンケートは、個人特性(年齢、職業、家族構成、起業活動への参加年数)とともに、後述する五つの変数に対応した質問項目を一問ずつ設定し、それらをリッカート尺度によって回答していただく形式を用いた。有効回答数は54件であった。アンケート用紙の質問では、まず、起業を経ての「家族の活動支援」と「地域集団への発言の積極性」の変化の二指標を測る質問項目を設定した。同時に、担い手自身の農村女性起業に対する満足感、目標コミットメント、組織コミットメントの三指標を測るための項目を設定している。

創業活動の連鎖現象に注目する視点では、本研究は、模倣という概念をアントレプレナーシップのコンテキストで応用し、創業活動の拡散における模倣はどのような役割を果たすのか、模倣現象の背後にあるメカニズムはどのようなものか、そして、模倣的拡散におけるネットワークはどのような役割を果たすのか、という問題意識を持ちながら、考察を進めた。

4. 研究成果

近年、社会問題を解決する、または社会変化を引き起こす現象として、社会企業活動は世界的に研究者・実務家・政策立案家などからの注目を集めているが、そのコンセプトについて統一した見解は未だ少なく、既存の研究はそのアプローチがどのように社会的課

題を完全に解決するのかということよりも、未だその現象を解明しようとするにとどまっている。

金融危機、景気低迷、先進国市場の頭打ち、地域社会に対する既存の社会的責任の捉え方に関する国際社会の反発の声等に苦しめられているなか、農村地域の貧困者を顧客や生産者として捉えるアプローチは、既存の研究においては社会企業活動の一種と呼ばれているが、ビジネス世界の巨人とも言える多国籍企業を持続可能な発展に向けた適切な方向転換の戦略を提示してくれるものとはいえ、どういう過程で徹底的に社会的課題を解決することができるのかという視点からみると、実際に貧困の救済者や社会的課題の完全な解決方法となり得るのかということについては疑問が残る。

営利の目的だけで農村地域における貧困者や社会的課題の当事者を対象とするアプローチはあくまでも限界があるため、社会的課題の完全な解決という視点を取り入れ、多様な社会的課題の当事者のタイプとの接点において彼らの知識や潜在能力をベースとする取り組みが重要であることを本研究は指摘した。また、社会的課題の当事者自身の能動的な行動や行為、またはその潜在性を再認識することは、民間企業がこれまでの延長線上で厳しい反発を受けながら、活動を展開していくよりも、むしろ持続的発展・成長に向けたより効果的な貧困層向けのビジネスや社会貢献活動の展開を可能とする。

個人の課題解決で研究されてきた問題解決の理論(Theory of Human Problem Solving)』

を実際に農村地域における社会企業活動の事例で検証した結果、その個人ベースのプロセスが社会的課題の解決にも当てはまることができるという結論を本研究は導出した。

女性起業の視点では、一点目として、従来の中山間地域コミュニティ運営においていわば脇役と見なされることの多い農村女性にとって、起業活動は、彼女たちの地域コミュニティ運営参加への内発的動機づけを高めるといった傾向が見て取れた。ただし二点目として、担い手女性の実際面での運営関与は、図1に示されるように、いまだ困難な傾向にあったことが明らかとなった。

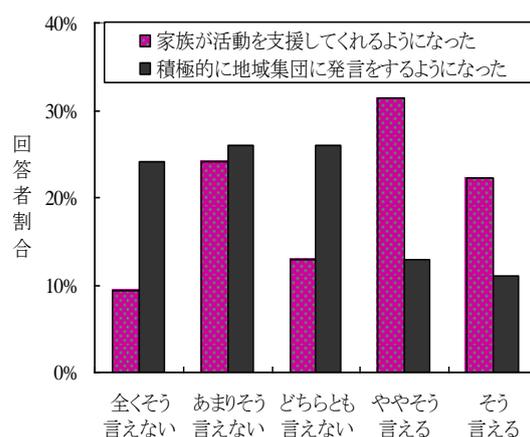


図1 農村女性グループへの参加により家族や地域との関わり方がどの程度変化したか

図1では、起業活動を通じた「地域集団への発言の積極性」の変化は、「家族による活動への支援」のそれに比べて低い数値に回答者が集中しており、女性のネットワークのみではコミュニティ運営への参加が困難な傾向が読み取れる。すなわち、農村女性起業を通じて女性の内発的動機づけが促進されたとしても、それが地域コミュニティ運営に十分に活かされているとはいえないという結果が示された。以上全ての結果を図2として整理する。

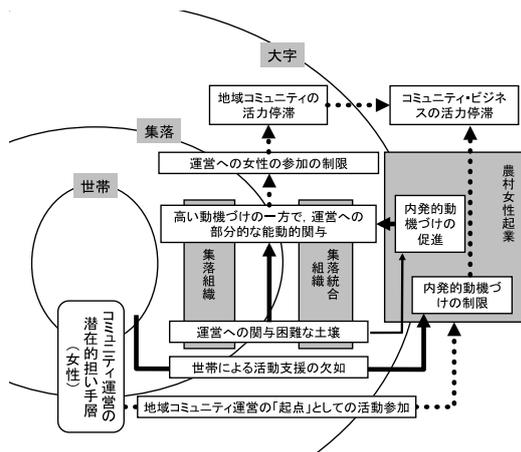


図 2 分析結果に基づくコミュニティ・ビジネスと地域コミュニティとの間の相互作用の現状と論点

創業連鎖への着眼点では、天河鎮の事例を分析し、農村地域における創業活動の拡散において、特性に基づく模倣、成果に基づく模倣および頻度に基づく模倣という三つのタイプの模倣の役割を考察した。個人レベルの創業活動の研究では、創業機会を長く存続させるために、いかに他人からの模倣を防ぐかが重要であると考えられる (Eckhardt and Shane, 2003)。しかしながら、天河鎮のケースで示したように、コミュニティーにおける創業活動の拡散を促進するうえで、模倣が重要な役割を果たした。模倣は一つの重要な学習のパターンとして、相対的に低い収益と低いリスクの組み合わせである (Ordanini, Rubera and DeFillippi, 2008, p.389)。模倣行為は創業活動のリスクを低下させることができるため、もっと多くの人を創業行為に引き付けることができた。そして、同じ模倣といっても、その性質とメカニズムはそれぞれ異なることが明らかとなった。

次に、このケースの考察を通じて、時間の経過とともに、創業活動の拡散プロセスにおける主要な模倣の類型も変化していることを認識することができた。この研究では、模倣とコミュニティーの創業活動を結合する

ことで、天河鎮における民用電器産業の発展プロセスの検討を通じて、発展段階ごとに、潜在的起業家の模倣型創業の動機と類型が異なることを示した。

さらに、創業活動の模倣的拡散における格差現象の存在を発見した。模倣に関する経営学の考察は、主に模倣という行為を採用した組織や個人に注目する。模倣していなかった（または、できなかった）組織や個人は研究の対象から除外されてきた。そのため、模倣現象において、模倣できるものとできないものとの間の比較はほとんど行われなかった。しかし、このケースの考察を通じて、模倣における格差の存在が意識されることとなった。天河鎮の事例では、数多くの外来の出稼ぎ労働者は、物理的にはその地域内にいても、地元の緊密なネットワークに参加できなかったため、模倣を通しての創業活動ができなかった。これは、模倣に格差が存在することを意味している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① Nguyen Chi Nghia, “The Mystery of Small Social Business by the Poor: Lessons from the Creation of Creative Solutions Based on the Poor’s Potential”. In Andrea, G. & Gary, B. (Eds.), *Social Business: Theory, Practice and Critical Perspectives*. Springer (Forthcoming), 2013 (査読なし)
- ② Nguyen Chi Nghia, Research on social problem-solving by poor people – Case study of the Association of Interdependent Arising of Persons with Disabilities, 青森中央学院大学地域マネジメント研究所『研究年報』、第 10 巻(印刷中), 2013 (査読なし)

- ③ Nguyen Chi Nghia & Aysenem Tuylieva, “Challenges of impact assessment and sustainable development in social entrepreneurship-The case study of Sanaburi Foundation after the 3.11 Great East Japan Earthquake” 4th International Social Innovation Research Conference at Birmingham University, ISIRC 2012 Proceedings, 16 pages (査読なし) .
- ④ Nguyen Chi Nghia, “Consideration of the process model of social problem-solving-Towards a behavioral approach in social entrepreneurship research” 4th International Social Innovation Research Conference at Birmingham University, ISIRC 2012 Proceedings, 17 pages (査読なし) .
- ⑤ 大滝 精一・Nguyen Chi Nghia, “Encouraging Producers of Inter-Industry Collaboration among SMEs in Tohoku Region”. In Y. Lecler, T. Yoshimoto & T. Fujimoto (Eds.), *The Dynamics of Regional Innovation: The Policy Challenge in Europe and Japan*. World Scientific Publishing Co.Pte Ltd, p. 473~492, 2012 (査読なし) .
- ⑥ Nguyen Chi Nghia 「危機に対応するコミュニティレジスタンス（地域の抵抗力）としての農商工連携の考察—東日本大震災への対応から見てきた研究の必要性—」青森中央学院大学地域マネジメント研究所『研究年報』、第8巻 57-61 頁、2012年3月（査読なし）
- ⑦ 王疆、農村地域の創業活動における模倣とネットワーク—中国温州市天河鎮の民用電器産業を事例として—、日本経営学会誌、第28巻、2011: 66-77 頁（査読あり）
- ⑧ 王疆、個人吸収能力、ネットワーク資源獲得とベンチャー企業のパフォーマンス：統合的な概念モデルの提案、ベンチャー・レビュー（日本ベンチャー学会誌）、第17巻、2011年：59-63 頁（査読あり）
- ⑨ 王疆、アントレプレナーシップとクラ

スター：社会ネットワークの役割、研究年報『経済学』（東北大学）、第71巻、2010年：247-261 頁（査読あり）

[学会発表] (計3件)

- ① Nguyen Chi Nghia and Aysenem Tuylieva, “Challenges of impact assessment and sustainable development in social entrepreneurship-The case study of Sanaburi Foundation after the 3.11 Great East Japan Earthquake”, 4th International Social Innovation Research Conference, Birmingham University, Birmingham, The United Kingdom, September 2012.
- ② Nguyen Chi Nghia, “Consideration of the process model of social problem-solving-Towards a behavioral approach in social entrepreneurship research”, 4th International Social Innovation Research Conference, Birmingham University, Birmingham, The United Kingdom, September 2012.
- ③ 王疆、農村地域の創業活動における模倣とネットワーク、アジア経営学会第17回全国大会、2010年9月11日（札幌大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大滝 精一 (OOTAKI SEIICHI)
東北大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：20138556

(2) 研究分担者

NGUYEN CHI NGHIA (NGUYEN CHI NGHIA)
青森中央学院大学・地域マネジメント研究所・研究員
研究者番号：80588616

王 疆 (OU KYOU)
東北大学・大学院経済学研究科・博士研究員
研究者番号：90597642

(3) 連携研究者

()

研究者番号：